

た。

そんなところに、外地の大学予科課程に在学していた者は特例で、内地の希望する大学に転入が認められるという話を聞き、多少気持ちが動いたが、とても進学できる状態ではなかったし、日本の将来もどうなるか展望が開けない時期でもあったので、進学はあきらめ、引き続き店で働くことにした。しかし、昭和二十五年四月になって突然、会社の都合で店が閉鎖されることになり退職する羽目になった。

わずか五年間の勤務だったが、その五年間で得た商売に対する興味と、その努力やアイデア次第で業績の向上が図れることに魅力を感じ、思い切って自営の道を選ぶことにした。父が渡満する以前に勤めていた農商務省の後輩から勧められて、茶を企業に納める仕事をしていった。それを引き継ぎ別に小売店も開業し、本格的な茶舗を経営することになり、外売りと合わせて業績も安定し生活にも余裕ができるようになった。

哈爾浜の残照

東京都 木村 正美

一 はじめに

世界では、今でも百三十以上の地域で大小の内乱、騒擾、抗争などの血なまぐさい出来事が起きており、地球上の四分の一以上の人々が慢性的な飢餓にあえいでいる。そして日本のみ虚構の平和を、五十年以上も続けてきた。飽食の時代、道徳の低下から人々の価値観も多様化してきている。

しかし、私はまだ戦前・戦中のあの日本人としての優れた価値観を変えずに、というよりも変えきれずにいる日本人の一人である。消費が美德などとは、どうしても思えない人間である。過酷な時代を生き抜いてきた日本人の老いの練り言を、後世の人々にぜひ伝えたいと思ひ、懐かしの学舎まなびや、哈爾浜学院の終焉を中心に書いた。

二 終戦の日前後のこと

昭和二十年八月十五日、終戦の日には私は哈爾濱にいた。当時、十七歳九カ月、満州国立大学哈爾濱学院に籍を置き、一年に入學して三カ月余がたっていた。

沖繩に米軍が上陸し、私の郷里鹿児島も頻繁に空襲を受けるようになった。家族の疎開先を探したり、買出しに行つて当座の間に必要な食糧を確保したりして、入校前の準備に手間取つていた。

家族を見捨てて、まるで敵前逃亡に似たような行為で、若い気持ちで朝鮮海峡を渡ってきたのだ。そんな事情でひと月遅れての入學だった。

学院は全寮制で、頭のとっぺんから足の先まですべて官費で支給されていた。したがつて当時、日常生活において一番の問題であった、衣・食・住は万全であった。

戦況は日に日に厳しくなり、郷里鹿児島市内も大爆撃を受け、九州南部のあちこちで甚大な被害が出ていた。家族がどうしているかも心配であった。しかし、私たちは幸いにも毎日、寮から学院校舎に通うことが

できて、厳しいロシア語の勉強に励んでいた。

当時は学院も戦時体制で、午前中はしっかりと勉強をさせられて、午後からは軍事教練でしぼられていた。しかし、まだまだ内地の学生生活と比べれば幸福だったと思う。

五月中旬になると「五月動員」で上級生が現役徴兵されて、学院にも事態の深刻さがひしひしと押し寄せてきた。それでもまだ気持ちのうえでは、学生気分が横溢していた。

ソ連軍が突如として侵攻を開始した、昭和二十年八月九日の直前の外出日には、哈爾濱市街に出掛けて、とある喫茶店に入った。そのウエートレスに、習いたてのロシア語で名前を聞いた。「チェブリディ」と名乗ったが、今考えてみるとユダヤ系の女性だったかと思う。白系ロシア人には見当たらない名前であった。そのときのことや、名前をいまだに覚えていくらいだから、習ったばかりのロシア語が、初めて実際に通じたのが、よほど嬉しかったのだろう。デートに誘ったが、ソ連の参戦そして終戦で、もちろん永久に

おじゃんとなった。

哈爾濱は、終戦から三日後の昭和二十年八月十八日に、ソ連軍が進駐してきて無血占領された。

当日早朝、轟々と響く地鳴りに、爆撃が始まったと思ひ、急いで二階の居室の窓をあけて外をのぞいた。

その瞬間、面と向かったのは、どす黒く汚れた一人のソ連兵の顔だった。轟々と音を出していたのは、ソ連軍の戦車だった。戦車の砲塔の天蓋を開けて、あちらこちらを見回していた。そのソ連兵の視線は、二階からのぞいている私より高いのだった。とうとう来るべき者が来たかといった気持ちになった。そう思うと自然に身震いがしてきた。

その次の瞬間、更に驚いたのは、その戦車の巨大さであった。作家の司馬遼太郎さんが、昔の自分の経験から日本の戦車が脆弱だったことを嘆いておられるが、事実、当時のソ連の最新戦車とは、駆逐艦とタグボートぐらいの差があったようだ。それを見ただけで、これはいかん、日本軍の相手ではないと観念したものだ。

三 学院日々の状況

八月十八日に学院の渋谷三郎院長は、学院に残っていた職員・学生を集められて、「将来ある君たちは、なんとしても命を永らえて日本に帰り、やがて春の巡りきて大和桜を咲かせるために、頑張るのだ」と訣別の辞を述べられた。

それから三日後、八月二十一日の未明に、ご夫妻と次男とが、官舎において従容としてピストルで自決された。覚悟のこととはいえ、残った我々一同は、その中心の柱を失い茫然自失となった。そして翌日の二十二日に、そのご遺体を学院本館の中庭に埋葬した。残っていた院生等約四十数人が整列して告別の儀を行った。

院の正門付近に、マンドリン銃（円形弾倉型自動小銃・形が楽器のマンドリンに似ている）を携帯した若いソ連兵二人が姿を見せていたが、すぐにどこかに立ち去ってしまった。二年生で滑空班員の久保さんが運転する、かつての戦利品のフォード三十七年型トラックで、院長ご夫妻と次男のご遺体を官舎から運び出し

た。何でも押取していくソ連軍だったが、この時点ではまだこの車は略奪されていなかった。どこの軍隊でもそうだろうが、進駐している人数が少ない間は、おとなしいものだ。しかし、このトラックも、この日が見納めであった。

質素なうちにも敬肅に告別・埋葬の儀を終えた。

八月二十二日、学院寮前の大通りを、早朝から日没近くまで、延々と日本軍の将兵の隊列が続いた。ソ連軍の捕虜となった人々である。「カーキ色の行進」と言っていた。

一個小隊に二人ぐらいのソ連兵が、マンドリン銃を構えていつでも撃てるような姿勢で、隊列の両側に付いていた。沿道に並んでその行進を眺めている満人たちは、それぞれ小石を投げたり、唾を吐きかけたり、快哉の声をあげたりして、侮辱の行為を露骨に表していた。

それに対して、我が将兵は憔悴しきっており、頭を上げる者もなく、どんな侮辱の言葉にも耐えて、ただ黙々と歩いている。これを見ていて実に齒がゆく思

い、かつ悔しくて、戦争に負けるところも態度が変わるものかと、しみじみと感じたものだった。

八月二十三日、渋谷院長ご生前の指導もあつて、落ち着き先のあてがある院生は、どんどん退寮してもよいということになっていたので、だんだんと出て行く者もあり、寮も寂しくなってきた。

そのころ街中は、「日本人狩り」で荒れ狂う満人と、略奪にうつつを抜かずソ連兵で溢れていた。寮の前でも満人が、徒党を組んで獲物が出てくるのを待ち構えている。寮を出て行く院生の荷物を狙って、暴力で奪ったり鉤付き棒で引ったくったりするのだ。せっかく意気揚々として寮を出ていったのに、荷物を奪われてすごすごと戻ってくる者もいた。

日本兵捕虜の行進は、今日も終日続いていた。在留邦人に対する「男狩り」も始まっているという噂も入ってきた。一人捕まえると五十円がソ連軍から支払われるということだが、真偽の程は定かでないかった。

カーキ色の衣服を身に着けていれば日本人。戦闘帽（日本兵であれば無論のこと、戦時中は在留邦人や学

生でも、みんなこの種の帽子)をかぶっているのは日本人。眼鏡をかけていれば二人のうち一人は日本人。裏底に鋌の付いた軍靴を履いていれば日本人。親指の部分が別れた足袋を履いていれば日本人。ズボンにゲートルを巻いていれば日本人。などなど、日本人はすぐに見分けがつく。そのように寮に出入りしていた満人が教えてくれた。この満人は、比較的親日的な満人であったが、そうは言ってもカーキ色以外の服など、院生はだれも持っていない。

八月二十四日、未明に寮内でピストルの発射音が、鋭く四周に響いた。何事かと寮内を探索する。そのうちに最後の学監としてわれわれと寝食を共にしていた、白井長助先生のご家族六人全員が自決されたのを発見した。ご家族をこの春に内地から呼び寄せられたばかりであった。

ご一家は、ご家族が来られてから白系ロシア人の所有する家を借りて、哈爾濱の生活を水入らずで楽しんでおられたが、終戦になってこの借家を追われ、寮に避難されていたのだ。小学五年生以下四人の子供さん

は、寮生にすぐになつき、かわいらしかった。

痛ましい限りであった。食堂の食卓を壊して急造の棺桶を作り、それに安置した。南寮の中庭に穴を掘り急いで埋葬した。穴掘り作業中、ソ連兵数人が来て武器秘匿ではないかと疑っている。彼らの目的は略奪である。覆った毛布をめくって中を見せると、慌てて手を振り退散していった。埋葬作業中にも、別のソ連兵数人が来て棺の中をのぞきこみ、遺体を見て黙って去っていった。

こんな悲惨な事件が続き、なんともいいようのない気持ちでいっぱいであった。

この日から市街にある一般邦人の家への押し込み強盗、略奪が一段と激しくなってきた。

「ベルリン休暇」と同じで「哈爾濱休暇」が始まったのかもしれないと思った。(ベルリン休暇とは、独ソ戦でベルリンが陥落した後、ベルリン市民に対するソ連兵による連日連夜にわたるすさまじい暴行略奪の行為のこと)

八月二十五日、寮の周辺でも実際に男狩りが行われ

ていることを確認した。南嶺・霧虹橋付近が特に激しいとのことだった。後に知ったことだが、哈爾濱での男狩りは最も激しく峻烈を極めていたそうだ。約二万六千人にもものぼる男が捕らえられて、牡丹江まで、ほとんど徒歩で連れて行かれた。労働はあまり無かったようだが、食べ物とは与えられずに、自分で買い求めて食べていたようだ。そのため疲労、飢渴、昼夜の寒暖差などから体力が弱り、そこに疫病が蔓延して、大勢の犠牲者が出たとのことだった。

何の目的があつてそんなことをしたのかはよく分からないが、スラブ民族の伝統的な手法からきていたのかとも考えられる。二カ月ぐらいたつたらそれらのことも次第に治まり、捕らえられた男は、逐次哈爾濱に帰されてきた。

八月二十六日、学院の竹内教授が、中国人の学院生とソ連兵数人を連れて寮にこられた。中国人の学生は、ついこの間まで机を並べて毎日顔を合わせ、寝食を共にしていた友人だったのに、今は我々を敵対視したような敵しい態度をとつていて、まったく無言のまま

まソ連兵の先導をしていたのだ。

彼らの要求は、寮の明け渡しであった。竹内教授は「本日をもって、閉寮する」と言われた。ペテルブルグでロシア革命をつぶさに体験し、ロシア女性を夫人として娶られ、この激動の時代を生き抜いてこられた、ロシア・中国通の教授の決断だ。在寮生一同はその指示に従った。

寮が閉鎖されたら行く先のない私は、教授の指示で応召中でまだ戻っていない島木先生の留守宅に、一時避難することとなった。

しかし、その家は一部屋しかない狭い借家だったので、島木先生の奥様の口利きで、近くの女学校の校舎の一部に入ることとなった。そこには先住者がいた。どこかの部隊から脱走してきた日本兵五人であった。こうして彼らとの新生活が始まったのだった。これからは、暦のない運命を天に任せた日々となった。

四 脱走兵との数奇な生活

脱走兵たちは、軍服も持っていないが五人とも中国

服を着て変装していた。その時、私はといえば、寮の
コックが置いて逃げた柳行李の中から、くたびれた中
国人風の黒ズボン、汗で色褪せた白のシャツを拝借し
て着ていた。それに寮内で見つけた中折帽をかぶって
いた。この中折帽は、チェコ製の高級品であったが、
そのままでは怪しまれるので、寮の庭の水溜まりで踏
みつぶして、馬車マヤチの馱者がかぶるようなかっこうにし
ていた。

脱走兵の階級は、伍長が二人、兵長が二人、そして
万年以上等兵のような態度の上等兵一人の五人である。
そのうちこの上等兵が、年齢的にも三十四、五歳で一
番年嵩で、しかも目つきも鋭く、五人の中ではなんと
なく実権をもっているようだったので、その上等兵に
姓名を名乗ってあいさつをしたが、じいっと見据えて
軽くうなずくだけだった。ちょうど小説で読んだ牢名
主のような態度だった。

すぐに夜になったので、その辺りに散らかっていた
机やいすを片付けて、教室の片隅にアンペラ一枚を敷
き、私物を入れた麻袋を枕にして体の上に毛布を一枚

巻きつけて、兵隊たちに遠慮しながら小さくなって横
になった。

初対面るとき、軍服でなかったのちょっと奇異に
思い、何か訳ありという感じがしていた。奥地の原隊
から終戦になって早々と逃亡してきたのか、または公
用外出か何かの名目で外出して、そのまま逃げてきた
のか、そんな感じのする五人の兵隊だった。「どうして
ここに？」と聞くわけにもいかず、判断はできなかつ
たが、五人共に一癖も二癖もありそんな人物だった。

翌日、日が高くなったころ、学校の近くに住んでい
るらしいちょっと小粋な感じのする女性が、風呂敷に
飯盒や食べ物を包んで持ってきた。兵隊たちは「姐さ
ん」と呼んでいた。十分な量ではなかったが、兵隊の
一人が私にも分けてくれた。食事は「姐さん」の届け
る一日一度の食事だけになったが、我慢するほかなか
った。食事を済ますともう何もすることがなかった。

時々、校内を歩き回ってめぼしい物がないかとあ
さったり、窓外から市街の変化を探るのが日課のよう
になった。二階の教室に寝泊まりしていたので、その

二階の窓からは、平行に走っている幾つかの大通りの見通しができた。

捕虜の行進は依然として続いている。在満の全捕虜が、哈爾濱に集結させられているのではないかと思われるぐらいだった。あの激しかった男狩りで捕らえられた人々も混じっていたのではないかとも思われた。

一ブロック隔てた先の大通りは、車両専用になったのかトラック、兵員輸送車、ジープなどが忙しそうに往来していた。時々、ソ連軍軍楽隊の行進もあったが、楽の音はそれなりの感慨を敗残の我が身にも与えてくれた。校内は私たちのほかは全く人の気配がなく、夜も昼もひっそりと静まり返っていた。飯盒の蓋でも落とすものならば、階全体に響き渡るような静寂さだ。兵隊たちも、物音には随分と気を配っていて、努めて静粛を保っていた。兵隊の一人が、音を立てない室内歩行法、隣室傍受法、夜間偵察法、観察場所選定法などを、いろいろと実戦的に教えてくれた。確かに、これらのことについては、彼らはベテランだった。

おとなしい一人の兵隊は、応召前は仕立屋の職人だったとこのことで「腕が落ちるとあかん」と言っていて、一日中縫い物をしていた。実用になるのかどうかも分からないのに、帆布のような生地でズボンを仕立てていたが、器用な手つきはさすがに年季の入っている人の腕だった。無心にそれに打ち込んでいる姿を見ていると、帰国できたらどこかの町の店先にて、同じかっこうをして仕立作業をして暮らすのだろうと想像していると、何だか平和な昔に見たことのある風景と重なり、遠い遠い日本が更に遠い夢の国のような気がしてきた。

単調で退屈で、しかも不潔な毎日を、ただ食べ物のことしか考えない慢性空腹症候群の状態で過ごしていた。兵隊たちにもだんだんといら立ちが募ってきたように、日々の様子が怒りっぽくなってきた。とうとう親分格の古参上等兵が口火を切った。「おい学生！お前さんちよっと出て行って街の様子を見てこいよ、お前さんならまだ子供に見られるからよお」と言った。こっちも望むところだったので、二つ返事で街に

出掛けた。

南崗は中国人とソ連兵ばかりのようで、物資も戦時中よりも豊富になっていったようだった。肉まんや包子、中国粽などが街頭で売られていたが、揚げ物の懐かしいおいしそうなにおいが漂ってきた。もう男狩りは終わったのか、その筋らしいソ連兵も中国人も見かけなかった。ただ三々五々と昼間から酔ったソ連兵たちが、強奪したり、ただ食いしたりして中国人に乱暴狼藉を働き、その都度悲鳴と非難の喚声があがっていた。ソ連兵の機嫌を取るために、案内役をする赤腕章（白系ロシア人がソ連軍に協力または同化している意味合いを示すために赤い腕章を付けていた。トラックなどに同乗してソ連兵の略奪の手引きや男狩りの先達をしたり、行為をした）が悪事をするとその反発は大きくなった。中ソの蜜月関係は、早くも崩れかけているようだった。

小金を持っていたので肉まんを三個買った。日本人と分かっているにも怪訝な顔もせず、よくも今まで無事だったねといわんばかりの笑顔を返した。あつあつ

のを立ち食いがおいしかった！ 食べながら喉仏がひくひくと引きつれていたのが分かった。体中に精気がよみがえる気分だった。

略奪の「ダバイ、ダバイ！」は相変わらずだが、男狩りが無くなった事実を確認したことは無上の晴れ晴れしい気持ちに浸れた。帰って兵隊たちに報告すると、みんなは顔をほころばせて喜んだ。まだ夕方には間があつたので、我も我もと、ただし隠密裏に一人一人要領よく出掛けて行つた。独りになって考えた。今日のように危険な偵察行動を私に最初にやらせたということは、今後も真つ先に毒味役、身代わり役を引き受けさせるつもりだろう。知り合つて日も浅い私はよそ者で、余計な者なのだから新兵以下なのだ。気を許してはいけないと心に決めた。四人は帰ってきたが、そのうちの三人は高粱酒のにおいを漂わせていた。上等兵は帰って来なかった。

四人のひそひそ話が、酒のせいかな今夜は大きい。食事を運んでくる姐さんは上等兵の昔からの知り合いで、上等兵が誘つて皆で集団脱走し、最初に転がり込

んだのが彼女の家。日本軍の探索を避けるためにこの教室に潜んでいるのだ。公金らしい大金を姐さんの家に隠してある。我々の食事代はその一部を流用している。上等兵と姐さんの仲はできている。今ごろは二人でしっぽりと……、畜生っ！ などと声を大きくしてしゃべっている。久し振りの酒で酔いが回ってきたのだらう、口が軽い。聞くともなく聞いてしまった。今までの疑問がこれで分かった。

その夜のこと、物音に目が覚めた。さすがに元兵隊たちだ、すでに全員起きて窓際から銃眼をのぞく構えで窓下の運動場を見据えていた。白く浮かんだ運動場に、校門から黒い人影の列が続く。今にも前に倒れそうな重たい足取りと、背負っている荷物や赤子の膨らみで、奥地からの避難民だということが分かった。先導していたソ連兵の懐中電灯が消えて、校門を去って行った。指揮している男性の低い押し殺したような言葉での話が終わるとぞろぞろと校内に入ったが、すぐに静かになった。時々、赤子のむずかる泣き声がする。何十キロ、否、何百キロの旅路の末だったらう、

精も根も尽き果てて、わずかでも雨露をしのげる場所を求めて、眠ることのできる束の間の幸せを願ってたり着いたのだらう。私は、我が身のつらさが彼らの辛酸とは比較にならないことを痛感した。

翌朝、避難民の貧しい、しかし子供たちの嬉々とした声のなかに立ちのぼる炊煙を見ていた。と、いつの間にか戻っていた上等兵が、私の肩を叩いて後ろから声をかけてきた。「おい、学生よお！ 身のためだから言っとくけどなあ、あの連中とはかわりを持たないでくれよな」と言う。見事に先制の釘を刺された。有無を言わさないドスの利いた声だった。確かにそのとおりだった。慰めの言葉など何一つ腹の足しにはならないのだ。最も必要としている物は食糧であり、金なのだ。私も兵隊たちも、満足には食べていない、分け与えるべき物は何も無いのだ。悲しかった。

夜の帳がおりた。電気のない真つ暗な闇の中では、膝を抱いて寝るしかない。階下の避難民も早々と眠る。突然に悲鳴があがる、四、五条の懐中電灯の光線の輪が階下の教室の中で躍っている。「そら、おい

でなすった」と兵隊のだけれが小声で言った。こうなることは百も承知の言い草だった。

一カ所にかたまるらしいドドドドッと波のような足音と悲鳴、酔ったソ連兵の「ダバイ、ダバイ」の濁声、鯨よせに遭った小魚の群れのように、群れの中に首を突っ込んで、難を逃れなければ食われてしまう。やがて生贄の獲物が引き出され、三、四人のソ連兵に軽々と担ぎ出される。両親や夫の助けを求める絶叫と悲鳴、残された人たちの動揺と嗚咽、運動場の遠近に拡げられる集団強姦の地獄絵、一際高い悲鳴の後の号泣、生き地獄とはこういうものかと顔を背けるほかは致し方なかった。

「ダバイ、ダバイ」の罵声とマート(卑猥なものしり言葉)。個々の悪行の塊の中にあっても、ソ連兵の一人は必ずマンドリンを構えて周りを見張っている。

どれくらい時間がたったろうか、その間私は息をしていたのだろうか、血が逆流して頭はがんと鳴り出し、鼓動は高ぶり、のどは乾ききってしまったが、そんなことよりも、自分の不甲斐なさと、敗者の

惨めさ悔しさが湧き出ていた。手榴弾の一つもあったら投げつけていただろうか？ やはりそうはしなかっただろう。そのために、奴らは集団虐殺というカードを持っているのだ。兵隊たちも終始無言であったが、一人の兵隊が吐き捨てるようにつぶやいて言った。「耐え難きを耐え、忍び難きを忍べ、ということさ」

翌日の昼過ぎ、おそらく一日一食なのだろう、食事をとってから次の宿営地に向かって立ち去っていった。少なくとも遠目には何事もなかったかのように見えた。そうだ！ 何事もなかったことにしてくれ、忘れてくれ、すべて忘れ去ることだ。そして一人でも多く日本に帰り着いてくれ。遠ざかる隊列を見送りながら、そう祈っていた。

数日して島木先生の奥様から、主人が無事に帰ってきましたので一度きてくださいという言葉があつた。帰宅してすぐに鉄路局に通訳として勤められたとのことで、休日に伺った。家は四囲を煉瓦塀で囲まれた学院の中にある棟割り長屋の一軒だった。頑丈な馬車門の横に潜り戸があり、それをくぐると否応なし

に、白系ロシア人の大家の庭先を通らなければならぬ。二頭の猛犬が飼われており、外来者には猛烈な勢いで吠えかかった。退寮の日に初めて行ったときにその洗礼を受けた。そして陰險な感じの大家老夫婦が、胡散臭げに私をにらみ、大きな舌打ちを続けて犬を室内に入れたのだった。今度も同じだったが、一つだけ違ったのは、大家の代わりに赤腕章を着けた息子と娘が、もっと尊大ぶっていた。不気味で不愉快だった。

五 島木先生の死

島木先生は学院十五期生で先輩であった。授業は受けたことはなかったが、滑空班（グライダー班）でお世話になった。だれも気付かないうちにいなくなられたが、それが七月末の召集だった。苦勞されたのだから、お会いしたら浅黒い肌が一層日焼けしており、二カ月前よりも随分やせておられた。

「いやあ、あの大家の犬どもがうるさくてね。昨日もここにきたソ連軍の将校連中が、今度来たとき、撃ち殺してやるって言っていたよ」と積もる話の合間には、そんなことも言っていて微笑された。この日が島木先

生にお会いする最後の日になるうとは夢想だにしなかった。犬どもは、島木先生のことだったのか。ロシア語特有の意地の悪いアイロニーでぼかしたのだ。

翌朝、奥様が視線の定まらない目つきで、学校にきて助けを求めた。奥様を後にして駆け付けた。島木先生は、院の潜り戸を三、四歩出たところの舗道の上に、いかにも不自然なかつこうで、左足を抱くようにしてうつぶせに倒れておられた。駆け寄って抱き起こすと、ばっちりとは見開いた瞳に、街路樹のアカシアの深緑と澄み渡った秋の青空が映って、まだ生きておられるように思えた。

昨夜遅くに、件の将校たちが酔って先生の家にやってきて、飲み直そうと言って島木先生を無理やりに連れ出したらしい。それを見送った奥様は、その直後に一発の銃声を聞いた。奥様は胸騒ぎがしたが、恐ろしくもあり、まさかそんなこととはという気持ちに先に立って、夜明けを待つて事態を発見したとのことだ。同じく駆け付けてきた同期生の谷君と二人して、先生の家の床の上に運び込んだ。また、無情の犬どもが吠え

だしたが、大家の一族は顔を見せなかった。家の中から様子を伺っていたのだろう。形だけでも湯灌をしようとして、服を脱がせにかかったが無駄骨だった。島木先生の服は、協和会服を青インクで染めたものだった。大量の血糊を含んで凝結しているので、ガバガバに乾いた上着の胸元をはだけることはできたが、白い下着は、血糊と青インクで凄惨な有様だった。無理にはがそうとすると、弛緩した皮膚が肉ごとはがれそうに密着してついてくる。湯に浸したタオルで、だましまししながら傷口だけは探し当てた。

左脇下に一カ所、鉛筆の太さの銃創があった。心臓を直撃した盲管銃創だった。鳥肌の立つような気持ちになった。「殺し屋」の専門家のような手口だ。陰険な大家一族が、唆したに違いない。緊迫した世情の中の出来事なので時間的にも余裕なく、そのままの姿で忠霊塔裏の空き地に埋葬した。どういう方法で運んだのか、引揚げまで多数の死者を埋葬したので、今ではごっちゃになって思い出せない。その臨時の特設墓地には、恐らく様々な非業な死、悲憤の死を遂げたで

あろう人々の土饅頭が、既に累々として奥の方まで続いていた。厳しい冬を越さなければ始まらなかった翌年の引揚げ開始まで、この何倍、何十倍の土饅頭がここだけでも作られたことだろう。島木先生の会葬者は十人前後であったが、本当に野辺の送りであった。

奥様が乳飲み子を前抱きにして、もみじの様な手をご自分の手に包み込んで「お父ちゃんとお別れよ。さよならよ、さよならよ」とご自身の生きて行くこれから先の覚悟を誓うかのように、告別の合掌をしていたお姿が脳裏から今も離れない。

六 その後の哈爾濱生活

奥地からの避難民は、来ては去り、また来ては去って行った。ソ連兵による暴行、強姦は、激しい夜もあれば平穏無事な夜もあった。顔にかまどの炭を塗っても、坊主刈りで男装しても、残忍な男たちの嗅覚は動物的だった。そのような夜は、自分が犯される方がましだと思っくらく悲しかった。

不可解なことは、避難民もソ連兵も、二階にはほとんど足を踏み入れなかったことだ。避難民は、たまに

は好奇心で上がってきても、私たちを見ると言葉を掛けることもなく、慌てて逃げ帰るのである。私たちが、中国風に装っていたせいかもしれないが、見知らぬ人間には、本能的に恐怖心を起こす習性になっていたのだろう。ソ連兵もめったに上がって来なかった。

最近読んだ本に、「ベルリンでも東独でも、ソ連兵から身を守る安全度は、地下室よりも階上の方が高かったとあり、さらに、平屋建ての農家に住み慣れた多くのソ連兵は、階上上がるのを好まなかった」と書いてあった。そうであれば、梯子を外される不安が彼らにはあったのだろうか。いずれにしてもソ連兵の死角の中に、脱走兵たちも私も、無意識に飛び込んでいて、生き長らえたというほかはない。

秋が深まったある日、歩いていると珍しく「ダバイ、ダバイ！」に行き当たった。奪われる物は小銭しかない、と考えて声のする方を振り返った。中年のソ連兵が、マンドリンを構えて「ダバイ、イジーシユダー（こっちに来い）、ラポータ、ラポータ（仕事だ、仕事だ）」と言いなから中庭に連れ込んで「タポール、

タポール」と言う。タポールとは、はて何だったわけ？ たしか斧のことだっけと考えているうちに、短く切った丸太の小山の前に連れて行かれた。薪割り仕事だ。早く解放されたいので、手のまめが潰れるのも我慢して頑張った。よく働く男と思ったのか、彼は戸外に出した椅子に腰かけて笑っている。仕事が終わった後がふるっていた。「ハラショー、ハラショー」の連発で、台所に連れ込んで、パン、ベーコン、チーズ、ビクルスなどを取り出し、テーブルいっぱい並べた。コップ二つも出してウオッカを注ぎ、自分が先に飲み、私にも飲めと言う。仕方ないので一気に飲んだが、空腹と激しい労働の後なので、アルコールの回りの早いことといったらなかった。食べて食べて、よく飲んだ。彼は満足そうだった。揚げ句の果て、私の手を手袋のように大きい手で包み、なでたりさすったりして「良いやつだ、いい人間だ」に始まり「日本に帰りたいか、おれも国に帰りたい」と胸ポケットから家族の写真まで取り出して説明をする。そのうちに酔いも回ってきたのか、「帰りたい、帰りたい」と、お

いおい泣き出す始末となった。あっけに取られて見ていたが、帰りには、テーブルにあった食べ物全部を新聞紙に包み込み、「持って行け、持って行け」と言った。気が変わって撃たれてはかなわないと思い、握手をして早々に逃げ帰った。その夜だけは兵隊たちの英雄になった。このように、善良というか、愚鈍というか判別しかねないソ連兵には何度も会った。

脱走兵のうち三人は、私が外出しているとき、忽然として去って行った。常々、「訳あり」とは思っていたが、何かあったのか、日本とは反対の北の某地に行くことを私にも誘ったことがあった。本当に北に行ったのかどうかは分からないが、彼らの秘密の核心だけは、ついに話してくれなかった。私は言を左右して適当に反対していた。毒味役は御免だ。

彼らがいなくなると、私は私の秘密の場所に行った。あった、あった！ 彼らが消えるつい二、三日前のこと、講堂の屋根裏へ続く二階の物置の板戸を何気なく外したら、見つけたのだ。彼らに話せば元も子もなくなるので、板戸を元通りにして戻り、絶対に

口外しなかった。見つけた物とは、講堂で映画などのときに使う暗幕と、和裁の運針練習に使う白木綿の粗布だった。黒・白・紺ならどんな布地でも、あの当時は飛ぶように売れたものだ。見つけたときには幻覚ではないかと我が目を疑ったものだった。これだけあれば一年は食べていける、綿入服も買えると思ひ、用心深く小出しにして中国人に売った。小金持ちになった。死んでも悔いがないと思うほど腹いっぱい食べたし、綿入服も買った。市場でふとしたことから知り合った、夫が「男狩り」にあったという婦人と話し合つて、荷を小出しにして用心深く、何回にも分けて婦人の家に運んだ。小学三年生の男の子がいたが、取りあえず同居した。今ごろ強調しても意味もないが、同居とはあくまでも同居であり、同棲ではない。何よりも先ず風呂に入って、柔らかな布団で寝ることができたのが最高だった。二人で売買に行ったが、婦人の生活も潤った。二十日ぐらいいいたか？ 十月二十三日に牡丹江から夫が帰ってきた。夜、「あんな男となぜ！」と言う、夫の妻をなじる声を聞いた。

翌朝、売買に行くと言って少し余分に布地を持って去った。その夜は道裡（中国人街）の宿に泊まったが、日本人と分かっても嫌な顔も、怪しみもしなかった。私も相当地胸が座ってきたものだ。

七　さらば！　哈爾濱

十月二十五日哈爾濱に初雪、このままでは哈爾濱での越冬は無理だと悟った。そうだ、少しでも南に行こう、そして少しでも日本に近づこうと決心をした。

市場でパン、カルパスその他の食糧を買い込んだ。

哈爾濱駅構内を避けて、有刺鉄線の破けた所から直接線路に入る。機関車が南に向いている約四十両編成の貨物列車。最後尾二両の無蓋車に避難民の群れ、そして日の丸の旗？　うそだ、錯覚だと思いつながら夢中で走る。途中で足が止まる、何か似て非なる旗だと考える。日の丸の旗が翻るなどということは何だろう。

これが韓国の旗とはまだ知らないで見たのだった。さらに近づいたら話し声で朝鮮の人と分かった。反日感情は中国人よりも強い、これは駄目だと考えて回れ右をする。機関車のところまで来た。中年のソ連人機関

手に若い中国人助手、「火夫を手伝うか」と言ってきた。一も二もない早速飛び乗る。午後二時だった。汽笛一声、発車だ。ぐらっと一揺れして力強く動き出す。同時だった、はらはらととめどもなく涙が溢れ出た。

白く薄く化粧をしているような霞んだ哈爾濱の街が徐々に遠ざかっていく。優しく、しかも冷たかった哈爾濱！　さようなら哈爾濱！　お前は最後まで貴婦人だった……。その日は忘れもしない昭和二十年十月二十六日。私の満十八歳の誕生日でもあった。速度を増した機関車の動輪音と合唱して、私の心は「どうにかなる、どうにかなるさ」と鼓動していた。

こうして哈爾濱での半年余にわたる地獄の生活は、思い出のかたに移動してしまったのだった。それからも祖国の土を踏むまでは、言うに言われぬ悲惨な行動だった。

今までに多くの方が体験記として記録をしておられるのと大同小異である。私は、哈爾濱の終戦から数カ月間の実情を記し、残忍、悲惨な生活を後世の人にも知ってもらいたいと願った次第である。